

## 地理教育とその周辺 —その実践—

原 真 —\*

### I. はじめに

高校の新教育課程が間近に迫り、いよいよ1994年度より実施されるのである。これに伴って、高校地理は、社会科の解体により、新設された「地理歴史科」に編入され、さらに、「地理A」と「地理B」に分割されるに至った。高校地理教育が制度・内容面において大きく変化しようとするこの時期に、今日までささやかではあったが、地理教育にかかわって20数年間の実践について、全般的にふりかえり少し整理してみたい。そして、これから地理教育に向って、新しい視点で具体的にどのようにして対応し実践していくかの踏み台にしたいと考えている。自己点検を兼ねつつ、新鮮な気持で地理教育に取り組み再出発したいものである。

最初は野外教育を様々な観点から実践に取り組み、その基盤に立って、徐々にではあるが実践分野を幾分なり広げていくように努めてきたつもりである。この小稿においては、これらの実践概要について紹介したい。さらに、地理教育の周辺にも少しではあるが触れてみることにする。

### II. 地理教育のあり方と実践

まず、大切なことは、地理教育における基本的態度や能力（学力）をどう育成するかである。つまり、地理教育観についての問いかけでもある。あたりまえのことだが、それは地理的空間認識としての地理的見方・考え方であり、かつ問題解決能力の育成である。そのためには、注入型教育を重視する教育観・学力観から、学習者の主体的活動をより積極的に地理教育に導入することでもある。例えば、観察、調査、発表、討議、リポートなど、さらに、総合学習、課題学習などにもできるだけ取り入れて、授業・学習形態に対しても注意を払ってはきた。

このこととも関連するが、基本的な教育方針と理念についても重視する必要を感じてきた。その主なものをあげると、①学習者の主体性と行動性、②学習方法とその過程、③地理の基礎的知識と概念、④地理的感性・感覚・価値観などである。次に地理教育において重視したい柱として、①野外教育、②地図教育、③国際理解教育、④環境教育、⑤視聴覚教育、⑥情報処理教育をあげたい。①と②は地理教育の基盤（本質）であり、③と④は目指すべき内容であり、⑤と⑥は学習・教育活動の深化・促進・関心にかかわる授業の補助

\* 愛知県立春日井西高等学校

手段である。

このような地理教育のあり方と実践の目指す方向は、地理における生涯学習の視点を加味したものもある。

### III. 地理教育の主な実践概要

#### (1) 野外教育

野外教育は総合学習と自己学習の性格も有し、生涯学習への発展の可能性を含んでいる<sup>1)</sup>と捉えて、様々な観点から実践を継続してきた。平板になりがちな授業・学習、また、地名・物産など暗記科目としてのイメージが強い地理学習に対する偏見を払拭することにおいても意義は極めて大きいものがある。

「地域の実態に接して、自ら主体的に学ぶことは極めて大切なことです。このことは地理学習において本質的なことです。また、今日、地域の課題は国内のみならず、世界とも関わっていることも少なくありません。そして、地域理解は世界理解へと発展していくきます」。この一文は、1987年5月に2年生に配布した「地域に学ぶ」地理教育についての参考資料の冒頭に記した学習者へのメッセージである。ここでいう野外教育とは、授業での野外観察・調査を中心につつ、遠足、修学旅行などの校外行事を含む一環した野外での地理教育の視点を有する活動のことである。

グループ研究と発表授業を取り入れ、より活発に野外教育の実践を推進してきた。高校においてもゼミ方式の発表と討議を加味すれば、授業・学習が大いに盛りあがるものである<sup>2)</sup>。過去、多くのすばらしい発表に出合ってきた。まとめのリポートも貴重な記録になり、大切に保存している。自己満足かもしれないが、

学習者は結構よく頑張るものである、とその手応えに感心することがしばしばである。

修学旅行にも、「地域に学ぶ修学旅行」として、巡検方式を導入して、金沢・輪島、神戸などを訪ねたこともあった。班・クラス別で行動し、その活動記録を文化祭で展示発表して締めくくったものである<sup>3,4)</sup>。

しかし、授業・学習の効率優先、取り組みに対する負担、フィールドでの安全性の問題、周囲の理解不足などの理由により、むしろ軽視・衰退化の方向にある<sup>4,5)</sup>。これらの反省に立ってか、新学習指導要領では、地理的見方・考え方の強調とともに野外（地域）学習の重視を唱えて、また一方、新しい高校地理の教科書も内容・記載に工夫を凝らし改善に努めている。

地理教育の活性化・魅力化が強調されるなか、再度、野外教育のあり方を自問することも大切である。野外教育の軽視からは、地理教育の前進はありえない、とあえて唱えたい。そして、野外教育は地理教育全般を活気づける大きな効果があることも強調しておきたい。今後、国際化・情報化の著しい進展に対応し、さらに、環境教育の視点も積極的に取り入れた野外教育がますます求められているのではないかと考えている。

#### (2) 地図教育

「地理的事象は地図を通じて理解を深めることができる。地図には二つの意味がある。一つは学習活動の情報源として利用することであり、もう一つは物語として読むことである」と安井司は述べる<sup>7)</sup>。地図を情報源として利用することはあえて指摘されるまでもないが、しかし実際には、どのようにしてまた

どこまで地図を情報源として活用していくかが問われるところである。他方、地図を物語として読むということは、含蓄深い表現である。地図は役に立つという観点での教育に重点が置かれすぎたのではないか、と反省させられることもある。地図学習の楽しさや情操面の大切さを指摘されているのではないかと思う。

まずは様々な地図との出会いを大切にしたいものである。地図展、古地図展などにも積極的に出かけ、会場で得たポスターや地図、さらに記念冊子、またスライドなどにより、地図への誘いとすることがよくある。同時に、愛知県、名古屋市、春日井市などの地元の行政側で作成している地図類も、学習者の身近な地域の地図との出会いにもなり親しみをもつものである。また、海外に出かけた折り、現地での地図との出会いは、一つの大きな楽しみである。購入できるものであれば、地図や地図帳は手に入れたいものである。国際化時代に対応した地図教育にとっても大切なことであろう。このことは、地図への関心と世界への関心をより高めるうえで効果的である。

地図学習イコール地形図学習のパターンではなかなか地図への関心が高まらず、逆効果になるおそれもある。すなわち、地図に対し、親しみと楽しさを学習者へより発信していくかが重要であり、その次に、地図の大切さ有益さを認識し、さらに、地図そのものの理解へと発展していきたい。また、地図は環境教育の視点からも大いに活用したいものである。

時間的な余裕はあまりないが、分布図や統計地図の作成などの作業学習を導入していくことも、空間認識するためには有効なことで

ある。勤務校の通学分布図などは学習者の関心を高める。そして、教職員の通勤圏も作成し比較すれば効果的である。また、県内の高校・大学の立地を図化し、人口規模や人口変動などの市町村区の実態や交通機関との関係を把握すれば興味深くなる。メンタルマップの世界は意外性も強く、地図に対する認識や興味・関心を新たにすることもできる。メンタルな地図の風景で多様なことが読みとることができるものである。生活地域などのメンタルマップも実施している。手書き世界地図や日本地図も考えさせられることが少なくなっている。

新旧の地形図を使用し、生活地域の変化に注目しながら読図も試みたい。野外教育を実施する場合、大変役に立つものである。国土地理院に注文すれば、明治期からの地形図が得られる。野外教育において、学習者のフィールドワークの折り、コピーして配布するように心がけている。地理履修が多くあれば、学習者の生活地域をほぼカバーできる範囲で地形図を特別注文して作製すれば申し分ない。前任校では、全員が地理履習であったので、名古屋とその周辺部の地形図の編集図を注文し、学習者全員に配布することができた。都市、土地利用、交通、地形など様々な観点で利用した。

さらに、「犬山」と「養老」の地形図（1/25,000）に基づいて、2人一組で地形図の読図プリント学習も行った。扇状地と土地利用、集落立地、都市化、水環境など話し合いながら作業的に読図を深めていった。秋の遠足にも養老の地形図は現地で活用することもできた。その時は、近鉄で名古屋から桑名経由で養老線で養老に向った。養老線は養老山地の

山麓に沿って走り、断層崖と扇状地の地形を観察するには好都合である。養老駅に近づく時に、車中で近くに立って窓の外を見ていた生徒が、突然に私に向って、「先生、今の小さなトンネルが天井川をくぐっているのですか」と言った。一般の人たちと一緒に車内で感動したこと也有った。一つの地形図学習の成果かも知れない。

高度情報化社会の到来と地図製作技術の著しい進歩により、地図表現・情報もますます高度化・複雑化し、より豊かな地図情報を発信し、地図の社会的役割をより高めてきた。これから時代に対応した新しい視点での地図教育の期待も大きいのではないか。この点は、新学習指導要領でも指摘されるところもある。

地図教育の一つの大きな課題は、「現在、地理教育の分野において体系だった地図学習の手引きなどがないため教科書・担当の教師によってその学習内容は異なっている。もちろん、教科書・担当の教師によって個性豊かで千差万別な地図学習があっても良いのであるがやはり児童・生徒の発達段階に対応した中で最低限の共通した授業内容というものが存在しても良いのではないかであろうか」と伊藤等が述べる<sup>8)</sup>如く、小・中・高校の地図教育の系統性の問題であろう。

### (3) 国際理解教育

今回の教育課程改革の大きなねらいの一つに国際化の対応がある。このことからも国際理解教育がクローズアップされてきたのである。しかし、国際理解教育の必要性は、それ以前から強いものがあり、その手引書も出版されていた<sup>9)</sup>。

地理教育はもともと国際理解を目指すべき

目標を有するものであり、国際理解教育の要であると考えている。今日の国際情勢を鑑みると、地理的視点や解釈は重要性を増していくのではないだろうか。そして、今、なぜ国際理解教育なのかと問い合わせることも必要があるのでないか。国際理解教育を試みるにあたって、関心と問題意識を高めることに留意したい。国際化の意義や背景について考え、なぜ国際理解が必要・強調されるのかについて、作文やアンケートのなど実施してきた。これらを通して、少しほは学習者の国際感覚と世界認識の把握に迫ってきた。その結果、偏見やするどい問題意識、豊かな感性などが交錯していることが浮き彫りされてきた<sup>10)</sup>。これらの試みで感じることは、日常的に国際問題や世界的課題に対し、積極的に眼を向け、学習者自身がグローバル思考を培っていく姿勢が、いかに大切であるかを強調したい。そのため新聞情報は有効な教材になり大いに活用している。学習者にも切りぬきをすすめている。

ところで、地理教育における国際理解で大切で必要なことは、世界の人々の暮らし方にもっと注目することである。つまり生活と文化理解への関心を高める必要性がある。そして、異文化教育が地理教育においても脚光を浴びてきたのである。しかしながら、異文化教育の地理教育的視点はまだ弱いのではないかと思われる。文化人類学の成果やルポルタージュなどが教材の中心になっている。文化地理学がより発展するのが待たれる。さらに、海外での地域研究の広がりと深まりが必要である。つまり地理分野から地理教材がもっと豊富になることが必要であると考えている。

近年、グローバル視点から、不平等として

の地域格差がより深刻な問題になっており、南北問題を含めた開発教育の重要性が注目され、その推進が極めて大切になってきたのである。この場合、教育する例と学習する側の価値観と倫理観も問い合わせることが求められてしまう。したがって、単に現状認識の枠内にとどまるものではなく、実践的な態度の育成も大切である<sup>11)</sup>。発展途上国（地域）の取り扱いで留意すべきことは、きびしい生活環境を強調し理解していくだけではなく、その地域の人々の暮らしから多くのことを学んでいく姿勢が必要であり、そして、私共の生活を同時に見つめ直すことも大切である。名古屋国際センター資料室で借用した『地球の仲間たち』のスライドはよい教材で活用した。アフリカのモロッコから南米のボリビアまでの21ヶ国の衣食住と子供たちの生活を紹介するもので、学習者は大いに参考になったと評判はすごぶるよかったです。

具体的な学習活動の中心はリポート作成である。その主要な柱として、①外国理解、②民族の生活・文化理解、③世界の課題などをあげている。関心の強い内容を具体的にテーマを設定し、大使館などの資料依頼、名古屋国際センター資料室への訪問、さらには愛知県犬山市にある野外博物館『リトルワールド』の見学などを積極的にすすめている。国立民族学博物館を修学旅行で見学したこと�数回あったが、生徒たちの好奇心は高まり満たされた。その後のリポート学習に発展し深まった事例も多くみられた。このような立派な施設は、国際理解教育に対する機関としても大いに活用でき、学習者にいろいろと刺激を与えるものである。

#### (4) 環境教育

今日、生活地域環境から地球環境に至るまで、環境問題が多面化かつ深刻化し、大きな社会的・国際的な課題になってきた。このような背景からも、環境教育の必要性・重要性が一段と高まっている。周知の如く、地理教育の目標やねらいの大きな柱には、自然と人間とのかかわりつまり環境とその地域性について追求することである。だがしかし、その実態は決して十分なものではなかったといえよう。近年、総合科学としての環境科学の著しい発展するなかにおいて、地理教育における環境教育のあり方を検討し、推進していくことにより、その役割をより高めることができるのである。理科教育における環境教育もますます重視され活発化されつつある<sup>12)</sup>。他方、最近になって文部省・環境庁は、それぞれの観点から環境教育に関しての冊子を作成している<sup>13, 14)</sup>。

平成5年版の『環境白書』において、環境管理、快適で環境にやさしい地域、環境影響評価、環境保全活動、環境教育、地球環境、環境行政など広範囲を扱っている。このことからもわかることだが、環境問題は人類生存そのものであり、かつ真の生活の質とそのあり方を問うものもある。さらに、言うまでもないことだが、環境問題は資源・エネルギー問題や人口問題などと密接にかかわり、より複雑化しているのである。

実践としては、少しではあるが多面的に実施してきた。居住環境の意識と評価<sup>15)</sup>や居住地域の観察活動（環境ウォッチング）を地理の環境教育入門として位置づけている。ここで環境について、地域で具体的・実際的に観て感じることの大切さを強調している。

災害や防災の観点に立った環境教育も重視したい。『防災白書』は大いに参考になり活用できよう。名古屋を含む尾張地方には溜池が多くある。勤務校の所在する春日井市内にも数多くの溜池が分布し、20個程度が現在利用されている。都市化により、また農業の衰退により、溜池不用論が高まり、多くの溜池が埋め立てられつつある。しかし、溜池には防災的な今日的機能も有している<sup>16)</sup> ことに気づくような教育の配慮も必要であろう。また、溜池は貴重な親水環境を兼ね地域の生活環境に潤いを与えるものもある。しかも、地域環境の文化財的側面からも極めて教育的価値もあり、その保存が望まれている。このように溜池は一つのよい環境教材になるのである。名古屋都心部付近に100メートルの若宮大通が東西に伸びているが、その中央部が公園になっており、その地下に、都市水害対策としての防災施設である調整池が設置されている。この目に触れることができない施設も環境教材として取りあげている。

平野の地形環境と暮らしでは濃尾平野を事例とする。日本最大規模の0メートル地帯と地盤沈下の実態を考える。平成3年6月に建設省中部地方建設局が発行した木曽川水系の『防御対象氾濫区域図』も治水・防災の視点から作成されたものである。また、木曽三川の治水・利水・親水など水環境も総合的に扱っている。

現在の港湾・都市再開発でウォーターフロントが見直され脚光を浴びている。アメニティとしてのウォーターフロントの役割に着目することにも配慮したい。近年の名古屋港、神戸港、大阪港、オーストラリアのシドニー港などを具体的に取りあげている。商店街の

アメニティ化では、名古屋の大曾根商店街の再開発によるモール化もよい教材になる。さらに歴史的文化的景観と自然景観にも大いに目を向けたいものである。住民や市民の環境保全運動として町並み保存運動と、イギリスのナショナルトラスト運動の事例などを紹介し、その背景と意義について考えていく。

発展途上国の劣悪な都市生活環境にも触れたい。タイの首都バンコクの事例を扱った。熱帯林については、開発教育の視点さらに地球環境問題からもよい教材のテーマ対象になる。景観美・風景美の大切さを最後に強調しておきたい。美しい風景が破壊され喪失の社会背景を考えつつ、すばらしい風景は貴重な環境であり資源であると問い合わせたい。したがって、環境教育は情操面をもより大切にしたいものである。

#### V. 地理教育の周辺

地理教育の推進をはかるには、教室での授業はもちろん最も大切であるが、授業外、学校外での教師自身の活動もまた大切である。このことは、名古屋地理学会の地理教育シンジウムでも少し述べたことがある<sup>17)</sup>。地域での地理教育の活性化で必要なことは、第一に地理教育担当者と地理研究者の交流が大切であると考えている。つまり、地域の地理教育研究会と地理学会との関係（連係）をより密接していくことである。さらに、地理教育研究会のあり方と活動についても検討し改善していく必要も強く感じる。そのためにも地域の教育行政の理解と支援体制がより大切になってくる。地理担当者の個人の力量だけでは、今日の地理教育を取り巻く情勢に

は対抗しきれないと思われるからである<sup>18)</sup>。

学習者に対する巡検・野外調査の意義が大きいことは既述したが、地理担当者の巡検参加はまた大切にしたいものである。やはり、教師自身が地域を見る眼つまり地域の空間認識を日頃から培っていく姿勢が必要である。そのためのトレーニングの機会として、巡検の役割があるのではないだろうか。様々なテーマや問題意識をもって巡検にかかわることは、より巡検を有意義にするものである。できるなら巡検を企画・実施するにこしたことはないだろう。地元地域をはじめ多くの研究会や学会などの巡検に積極的に参加し、また、巡検案内にもかかわって、貴重な経験を重ねることにも心がけてきたつもりである。学習者、同僚、PTA も含めて、様々な巡検など現地案内も実施してきた。このように巡検で多くの方々に出会い交流をもてることは地域理解とともに大切であると思う。しかも、巡検を通して多くの地域教材の蓄積ができ、授業に大いに還元できるものである。さらに、海外巡検は貴重な体験も含めその意義は極めて大きい。機会があればいや是非機会をつくって、より多く参加したいものである<sup>19)</sup>。まだまだ地理教育の周辺において、かかわって実践できる分野は少なくない。徐々に幅広く実践を試みたいとは常々思っているところである。

## V. 結 び に

以上のように紹介してきた実践の概要ではあるが、内容的にはまだまだ試行錯誤的な試みも少なくはない。そして、実践者自身の力量不足の側面も多々あり、さらに、教育環境

や地理教育自体の制約などにより、あまり十分には深めるまでには至っていないのが実情である。したがって、これから時代に対応した地理教育観を自ら形成しつつ、これらの実践の吟味と刷新をはかっていくことは言うまでもない。さらに、新しい分野への取り組みも急ぐ必要がある。つまり、新しい地理教育の模索とその実践に迫られていると思える。また、地理教育周辺とのかかわりをも大切にしたいものである。

〔付記〕本報告は1993年立命館地理学会シンポジウム「地理学は何を教えるべきか(2)―地理教育の方法と実践―」で報告した内容に加筆修正したものである。

## 注

- 1) 原 真一「『地域に学ぶ』地理教育―高校生の総合学習と生涯自己学習の立場で―」、地域 6、1981、43~48頁。
- 2) 原 真一「自主野外研究の実践報告―グループ学習・発表学習を導入した指導例」(その1)(その2)、地理月報273・274、1980、5~8頁、5~9頁。
- 3) 原 真一「地域に学ぶ修学旅行」、日本社会科教育学会発表、1984。
- 4) 原 真一、菊池不二夫、龍井昇治、北原安門「修学旅行と野外巡検」(座談会)、修学旅行1990-5、1990、6~14頁。
- 5) 原 真一「アンケート調査からみた高校地理教育の実態」、日本地理教育学会発表、1984。
- 6) 篠原重則「高校地理教育における野外調査の実施形態とその衰退機構―愛媛県公立高校の事例―」、新地理38-4、1991、23~37頁。
- 7) 安井 司「新しい地理教育への視点―地図なくして地理学習はない―」、立命館地理学5、1993、76頁。
- 8) 伊藤 等「小・中・高等学校における地図学習―地図教育に使用する語句の選定一覧―」、地図30-1、1992、1頁。
- 9) 日本ユネスコ国内委員会編『国際理解教育の手引き』、東京法令、1982、299頁。
- 10) 原 真一「高校生の国際感覚と世界認識を考える」、地理の広場76号、1991、34~40頁。
- 11) 原 真一「開発教育を考える」、名古屋・瀬戸地区高等学校社会科教育研究会誌、1989、26~27頁。

- 12) 沼田 真監修『環境教育のすすめ』、東海大学出版会、1987、235頁。
- 13) 文部省編『環境教育指導資料』(中学校・高等学校編)、大蔵省印刷局、1991、121頁。
- 14) 環境庁編『「みんなで築くよりよい環境」を求めて』、大蔵省印刷局、1988、93頁。
- 15) 原 真一「高校生の居住地域の認識と実態」、日本社会科教育学会発表、1985。
- 16) 朝日新聞記事「進む開発、減るため池」、1992、2.26。
- 17) 原 真一「高校地理教育の諸問題」(その2)、名古屋地理学会『地理教育シンポジウム』発表、1990。
- 18) 原 真一「混迷する愛知の高校地理教育」、同友会だより31、立命館大学地理学同友会、1989、9~10頁。
- 19) 特に野外歴史地理学研究会の国内と海外巡検では長年大変お世話になり、巡検について考えることが少しほどけるようになったような気もしている。がしかし、やはりまだまだである。